

『東方』二九五号より

「張学」の新しい境地

張 欣(法政大学)

今年には張愛玲没後十周年にあたる。一九九五年の彼女の逝去をきっかけに、張愛玲研究は中国語圏を中心に徐々に盛んになり、近年では論文はもとより、研究書もまた多数刊行されるようになった。そんな中、高全之氏の『張愛玲学——批評・考証・鈎沈』は格別に注目すべき一冊であろう。一九九五年、張愛玲の水葬に立会った著者は、故人を偲んで小説評論を書こうとしたが、それまでの「張論」に点在した考証の不備や誤読などに眉をひそめ、七年がかりでこの『張愛玲学』と題する著作を世に送り出した。本書は張愛玲文学についての新たな研究書中の一冊だが、これまでの「張学」に存在した諸問題を解決し、学問的研究の土台を固めようとする労作として紹介するのが更にふさわしいだろう。

『紅樓夢』を研究する学問が「紅学」と呼ばれてきたように、蓄積には差があるが、張愛玲を対象とした学術的研究も「張愛玲学」または「張学」と呼ばれるようになってきた。十九の章で構成される本書は初めての本格的な「張学」著作と言える。以下本書の特色を三つの部分に分けてまとめてみたい。

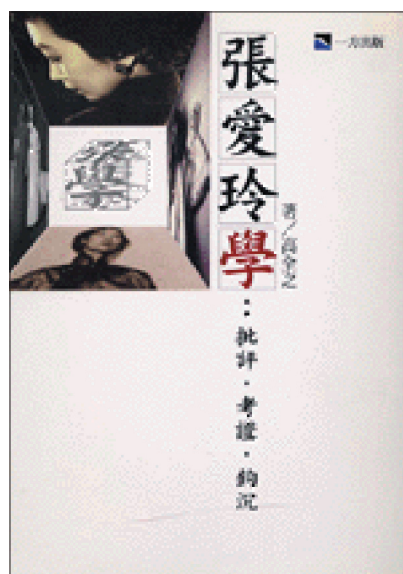
一、中国の古典小説、民俗および華人移民の背景等との関連を重視し、独自の視点から張愛玲の作品を見る

「金鎖記」は張愛玲の代表作として、誕生以来「中国古来最も偉大な中篇小説」(夏志清)と絶賛されたほか、さま

高全之著

『張愛玲学——批評・考証・鈎沈』

二〇〇三年・一方出版・三、五九一円



ざまな論評を受けたが、この作品の中に見られる纏足と鴉片というモチーフに注目して分析するのは本書が初めてであろう。第三章『金鎖記』的纏足和鴉片』によると、『金瓶梅』と『紅樓夢』の社会写真手法を受け継いだ『金鎖記』は、纏足を性的シンボルと見なす伝統的な見方を継承しながらも、この風俗が社会の変化の中で、徐々に風化していく事実を語っている。纏足の世代間の継承は被害者から加害者への転換の繰り返しであり、それは主人公である曹七巧の行為からも読み取れる。曹七巧の不幸および長い後家暮らしはすべてが制度や環境のせいだというのではなく、人間の弱さ、纏足の式微、鴉片の害も関連があり、階級闘争やフェミニズム理論のみでは分析しきれないものがあるという。

「沈香屑——第一炉香」については今まで「普遍的な人間性の弱点」(許子東)、「病的美感」(喬向東)、『愛情』の

▼『東方』295号より
一 「張学」の新しい境地
▲ 張 欣

クリックすると次の段にジャンプします。

神話にとらわれ」る(邵迎建)などの批評が提示されてきたが、この作品を『金瓶梅』との関連から読み解こうとする著者の試みは、これもまた前例を見ない新しいものである。第二章「飛蛾投火的盲目与清醒」で著者は『金瓶梅』の女性主人公たちの愛情様式を「飛蛾投火」(飛んで火に入る夏の虫)に譬え、自ら娼婦になる道を選んだ主人公の葛薇龍がこれら先人たちの経験を繰り返すものと分析し、『金瓶梅』が「因果応報」を標榜するのに対して、張愛玲は置かれた立場を自覚できる主人公の心理状態を重視するのだと評している。著者は数百年もの隔たりがある『金瓶梅』から「沈香屑——第一炉香」への繋がりを見出し、後者の複雑な物語の研究に古典小説の脈絡を導入した。他にも、『十八春』(『半生縁』)の主人公の曼楨と『秧歌』の主人公の月香は部分的には『紅樓夢』の中の林黛玉と晴雯の焼き直しであるというようなユニークな見方も提出し、張愛玲文学の源を遡るような興味深い解釈を試みた。

「桂花蒸、阿小悲秋」は張愛玲本人が「偏愛している」(水晶)一編であり、近年はよくポスト植民地主義理論で分析される。第四章「閻王与小鬼」で著者はそれらの分析の盲点に切り込み、主人公たちの間の緊張は「植民者と被植民者」の対立ではなく、「主従の関係」に根ざすものだということ、張愛玲の中華文化への自信やエキゾチズムを見過ぐすと、ポスト植民地主義理論による研究は表面的なものになりかねないとその問題点を指摘している。

『怨女』と『金鎖記』はいろんな視点から読み比べられてきたが、張愛玲の移民体験から詳細な分析を加えたのは恐らく著者が初めてだろう(王德威が少し触れたことはあるが)。なぜ曹七巧の容貌は銀に及ばなかったのか。なぜ曹七巧は息子も娘もいて銀は息子だけなのか。なぜ『金鎖記』の

▶ トップページにもどる

中の姜季沢は『怨女』で名もない人にされてしまったのか。結びで、なぜ曹七巧が死に、銀は生き残ったのか。第十五章『怨女』的芸術距離及其調適」で著者は張愛玲の移民体験から出発して多文化主義の背景に触れながら上述したような疑問に説得力のある答えを提供し、読者を『怨女』と『金鎖記』との比較に最適の視座へと導いてくれる。

二、文学本位を守りながら、張愛玲における政治問題を偏ることなく論じる

「一九五四年まで張愛玲は自ら政治の流れを遠ざけ」(水晶)、『秧歌』が出版された一九五四年からは「反共作家」になり、『秧歌』と『赤地之恋』は「虚偽の作品」だ(柯靈)といった短絡的諸説を前に、著者は悠揚迫らざる態度で張愛玲の政治観を分析し、張愛玲が『秧歌』と『赤地之恋』を自主的に書いたという点についても言及した。著者は張愛玲の政治についての考え方を、「政党は国家とは絶対に同一視できない」、「政治は人間性を徹底的に改造できない」、「左派にも右派にもがっかりする」、「個人の尊厳は侵害できない」などとまとめ、張愛玲の政治的理想は「健全な個人主義」の追求であると結論をつける。張愛玲には国を憂う気持ちが始終あるが、彼女の言う「国」は国家体制を超えた悠久なる歴史を有する「中国」のことを指すという。こうした解釈に立つて著者は張愛玲が「政治的知恵」の持ち主だと主張し、「張学」の視野を広げた。

従来議論の多かった『小艾』も著者は無産階級文学の実験だと判断し、この実験の最大の意味は張愛玲が自分の文学観に基づいて左翼の無産階級文学観に抵抗したところにあるという。つまり政治に左右されずに書いた人間性に関わる部分が輝いていて、『小艾』をほかの左翼文学とは異質

な作品にしているのである。

こうした解釈に関連して著者は、昨今権威的な台湾皇冠出版の『張愛玲全集』を「政治浄化版」だと指摘し、張愛玲の全体像を研究し理解するには初出の版本を精読しなければならぬという。

三、版本研究と史料収集

入念な版本研究は本書のもっとも大きな特色である。著者は入手できた張愛玲の全ての作品を精読し、各版をくらべ、多数の異同を新たに発見した。それは張愛玲研究を大きく一歩進める基礎的な研究上の貢献といえよう。

その中でも『赤地之恋』に関するテキスト比較は特筆すべきだろう。著者は一九五四年の香港天風版(中国語)と一九五六年の香港Union版(英語)などを比べ、異例として英語版のほうが「善本」だとの結論に達する(ほかの作品はすべて中国語版のほうが完成度が高いという)。英語版『赤地之恋』は『秧歌』の境地には達していないものの、『秧歌』の延長として自ずとスタイルを持ち、『秧歌』にはない痛快さがあるという。著者はさらにUnion版『赤地之恋』の再版およびその中国語訳が出されることを期待している。

張愛玲にとって生涯の友人の一人であるリチャード・マッカーシ(Richard M. McCarthy)に対する著者のインタビューはまた貴重な資料を提供してくれた。『秧歌』と『赤地之恋』は香港アメリカ新聞処(United States Information Agency)に命じられて書いたものだという説に対して、当時処長だったマッカーシが「張愛玲に翻訳を頼みましたが、彼女は小説を書くことを提案した」と答えたことで、張の小説創作の主体性は確認されたと言える。この発言を受けて『秧歌』と『赤地之恋』への偏見も少

トップページにもどる

しは和らぐだろう。

以上三つの部分にわけて『張愛玲学』を紹介した。著者は独自の論を展開しながら従来の研究や現代文学理論を用いた「張論」の問題点も指摘した。微かに違和感を感じる箇所がないとは言えないが、著者の地道な努力には敬意を払いたい。さらに本書の美点として付け加えたいのはその簡潔で自在な文章そのものである。舶来理論で消化不良を起こした論文はともかく、一般学術書にも稀なスタイルがあり、読み心地がいい。限りなく張愛玲に近づこうとする著者の姿に感心しながら興味津々に読み進んでいるうちに、いつしか最後のページを捲っていた。著者の張愛玲研究はまだ進行中とのことで、二冊目の『張愛玲学』にも期待したい。

なお、数多くの台湾人作者が大陸で本を出す際文字の改訂を許しているが、高全之氏は政治的理由によるいかなる改訂も認めていない。去年六月出版の『想像張愛玲——關於張愛玲的閱讀研究』(劉鋒傑、安徽教育出版社)は、傅雷、胡蘭成、夏志清、唐文標、柯靈、陳思和、孟悅らによる張愛玲研究を総括した、五百ページを超える野心作である。著者の劉鋒傑氏は特に胡蘭成と夏志清の研究に力点を置き、二人の張愛玲研究史における重要な位置を強調した。もしその中に一年以上前に出版された高氏の『張愛玲学』が取り上げられていたなら、それはさらに完全な研究史になっただろう。大陸の研究者が「張学」の新著をいち早く手に入れないのを残念に思うと同時に、高氏の「頑固」をありがたくも思う。

ちなみに高全之氏は一九七三年より張愛玲研究を始め、一九七六年に『当代中国小説論評』(幼獅出版)を出版した。渡米後約二十年間台湾文壇を離れ、現在は米国

Northrop Grumman社のシニアアドバイザーを務めていると聞く。前世紀九十年代の半ばに文壇復帰を果たして以来、『王禎和的小説世界』（三民書局、一九九七年）と『従張愛玲到林懷民』（『当代中国小説論評』の再版時改題）（三民書局、一九九八年）を出版している。

「張学」の新しい境地を開いた『張愛玲学』を「張迷」と非「張迷」にお薦めしたい。（法政大学）

トップページにもどる